

國學院大學學術情報リポジトリ

鯰と信仰：石造物・絵巻を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 細田, 博子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001467

鯀と信仰

—石造物・絵巻を中心に—

細田博子

論文要旨

鯀は地震を想起させる生き物であると周知されている。地震のイメージが、民衆の意識に根付いたのはいつからだろうか。筆者が鯀の伝説や俗信と鯀絵との因果関係を追求した結果、「鯀＝地震」のイメージは、地域によって差異があることが浮き彫りとなった。そして、西日本の限定的調査において鯀絵馬から、鯀は「地震」より「皮膚病」の印象が強い傾向にあることが判明している。然らば、鯀をモチーフとした石造物や、鯀にまつわる祭はどうだろうか。果たして鯀絵馬と同じような結果となりうるのだろうか。

そこで本調査では、鯀にまつわる石造物および地震に関わりの深い要石と、祭礼の考察を試みる。全国現地調査を試みるなかで様々な関連資料にふれる機会を得ているが、本稿の最後にてその中の一点、神田明神（明治以後、神田神社）に所蔵される『神田明神祭礼絵巻』（写本）を取り上げたい。石造物との因果関係に関してはまだ検討を必要とする。

キーワード

鯀、地震、皮膚病、石造物、祭

はじめに

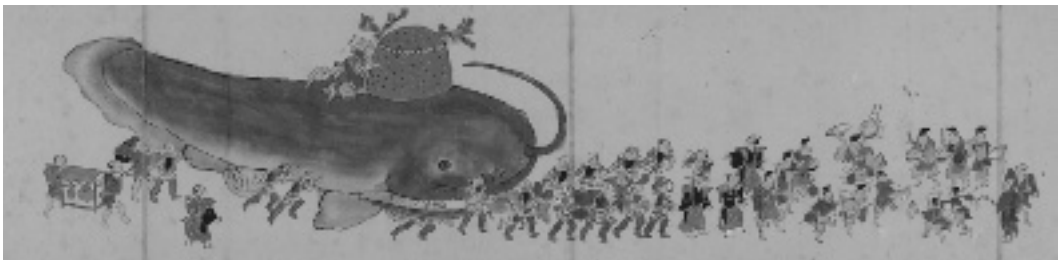
鯀は地震を想起させる生き物であると周知されている。地震のイメージが、民衆の意識に根付いたのはいつからだろうか。「鯀＝地震」のイメージは、歴史を遡れば1592年に天正地震を体験し大阪へ避難した秀吉の「ふしみのふしんなまつ大事にて候のまま、いかにもへんとうにいたし可申候間」と書かれた伏見城普請の書状に端を発しているが、1624年の大雑書「地底鯀之図」において龍王の名称のみが鯀に変えられた後、「大日本国地震之図」では、日本を地震から守るシンボルとして登場する竜が鯀に特定されたことで受容されるに至った。さらに下って1753年に上演された「暫」にて、竹熊入道という名で鯀坊主が現れ、「コレヤイ丁稚め、汝がなんぼ閑を据えて其処を動くまいと思っても、おれが今この

髭をちっとばかり動かすと、この秋のような地震がするぞ。」¹という台詞を吐いているが、これは恒常的に地下の鯰が暴れて地震を起こすという俗信が、庶民の意識に深く植えつけられていたことを明示している。

筆者が鯰の伝説や俗信と鯰絵との因果関係を追求した結果、「鯰＝地震」のイメージは、地域によって差異があることが浮き彫りとなった。²そして、西日本の限定的調査において鯰絵馬から、鯰は「地震」より「皮膚病」の印象が強い傾向にあることが判明している。³然らば、鯰をモチーフとした石造物や、鯰にまつわる祭はどうだろうか。果たして鯰絵馬と同じような結果となりうるのだろうか。

そこで本調査では、鯰にまつわる石造物および地震に関わりの深い要石と、祭礼の考察を試みる。全国現地調査を試みるなかで様々な関連資料にふれる機会を得ているが、本稿の最後にてその中の一点、神田明神（明治以後、神田神社）⁴に所蔵される「神田明神祭礼絵巻」（写本）【図1】を取り上げたい。

「神田明神祭礼絵巻」とは、寛政3（1791）年以前頃の祭礼の様子を描いた絵巻【図2】で、鯰が登場する祭礼を描いた絵巻として貴重な作例の一つである。模写本で、かつ署名も見当たらないため、絵師名は不明である。描かれている事物は祭礼の行列の様相が中心で、本稿ではその中でも「大鯰と要石」の出し物に注目する。これは三十五番白壁町の曳き物で、灰色に塗られた大鯰の像の頭部には、大きな石が乗っている。鯰が地震を抑える役割をしているという要石信仰に基づき、鹿島神宮の「要石」を頭に頂いた鯰の曳き物が、祭礼の主要な部分に描かれている。寛政期以降は同種の曳き物は途絶えていたようだが、



【図1】『神田明神祭礼図』（神田神社所有）（写本）



【図2】「神田明神祭礼繪巻」.[3][江戸後期][写] 国立国会図書館

平成17年には要石を載せた大鯰の曳き物が215年ぶりに復活し、話題を呼んだことは記憶に新しい。

なお本絵巻に関しては、「天下祭り絵巻の世界—龍ヶ崎市歴史民俗資料館所蔵「神田明神祭礼絵巻」一」（『王の身体王の肖像』1993年 pp124-177）にて、黒田日出男氏による絵画史的な観点からの詳細な記述がなされている。しかし、地震にまつわる習俗、特に石造物との関係性などについてはさらに検討を要すると思われるため、本稿の最後にてその点についても触れて置きたい。

一、鯰信仰とは何か

まず鯰信仰とは何か、具体的に提示する必要がある。

本調査では、鯰にちなんだ石造物や祭については、西日本地域の鯰絵馬や石造物、祭研究を行う半田隆夫氏の『神神と鯰』（1996私家版）、『神佛と鯰』（1999私家版）、『神佛と鯰続1』（2005私家版）の研究や、民俗学者の岩井宏實氏による日本全国の民間信仰にちなんだ地蔵や伝説に詳細な記述がある（他、現地調査や図録調査から得た情報及び文献⁵を含む）。他、独自で入手した情報（情報及び文献名は、脚註表示）に基づいて調査を行っている。

これらの調査結果には、同じ「鯰にちなんだ石造物」においても、鯰信仰から造られた石造物と、石そのものに霊が宿るアニミズム信仰の形が鯰であった場合に分けられるように捉えられる。

本来鯰信仰といえ、阿蘇で語り継がれている伝説が非常に深く関係しているが、佐藤征子氏はその伝説を下記のようにまとめている。

「かつて阿蘇谷は満々たる水をたたえた湖であった。阿蘇神社に祀られる阿蘇大明神（健磐龍命）が湖を干そうと、外輪山を蹴ったが、山が二重の峠になっていたため最初は破ることができなかった。次に立野を蹴ると水が勢いよく流れて数頭の鹿が流れ出て数鹿流ヶ滝と名付けた。湖には主の大鯰がいた。大鯰が湖から流れ着いたところを鯰村と呼ぶ。」⁶

この話には続きがある。

「翌朝、命は湖水のひいた跡を眺めるため、一の宮町手野の風追に立ってみた。ところが、湖の尻（西側）の半分は乾いていたが、眼下の手前半分は元のままである。よくよく見ると、ケオトシ坂（一の宮町中道）の松の枝に大きな鯰の鬣がかけ、尻尾は杵島岳中腹にはね上げて水を堰き止めていたのである。命は鯰を何とか追ひ下そう

とされるがなかなかうまくいかない。そこで鯰の鼻に大きな蔓で鼻ぐり通し、片隅の大岩（中通）に結びつけられた。鯰がのたうちまわると、その尾は下野の蛇ノ尾（阿蘇町）にまで達したという。命はなおも鯰に向かって退去するように迫り、やっと鯰もしぶしぶ命令に従って退去していった。退去するときいやいやながらであったため、くねくね曲がりながら下っていたので、鹿津川が蛇行しているのはそのせいであるという。かくして湖水がひき、天ツ神の教え通りに稲作を始められたが、出来が良くない。天ツ神に伺いをたてたところ、大鯰の祟ということが分かった。そこで湖の精である鯰の霊を自ら手野に祀り、同時に鯰をとることを固く禁じられたのである。⁷

阿蘇には、鯰伝説の由来と地名が繋がりを持つ地区が多く、伝説に登場した地名がそのまま現代でも使われている町名がある。阿蘇神社の社家の人たちは、いまなお鯰を食べない。それは鯰が阿蘇のカルデラが湖であったころの主であり、阿蘇大明神の使いとされてきたからである。⁸このように鯰信仰といえば、阿蘇信仰と語り注がれる所以であるといえよう。

先の佐藤氏は、江戸時代中期の『肥後國誌』と幕末に南阿蘇を中心にまとめられた「南郷事蹟」、さらに聞き書きによって集めた伝説をまとめて1953年に刊行された荒木精之著『阿蘇の伝説』の三種類を比較し、鯰は時代が下がるとともに親しみやすい神様の話に変容していることを述べている。⁹ほか、「阿蘇神社は速瓶玉命の創建と伝えられている。『隋書』倭国伝に「有阿蘇山，其石無故火起接天，俗以為異，因行禱祭」と見え、7世紀には阿蘇山が噴火し、神として祀られていたことをうかがわせる。」¹⁰という記述もあるように、古くから阿蘇と「神」、阿蘇と鯰には繋がりがあることがみてとれる。

また、村崎真知子氏は、

「阿蘇神社が発生する母体として、古代阿蘇地方に

A 阿蘇山を仰ぐ広い地域に、阿蘇山の活発な火山活動に対する恐怖と畏怖の念から、火山の神への信仰が起こる。やがてそれは中岳の噴火口を神体とする火山信仰となる。

B 阿蘇谷の開拓に伴い、農業神・開拓神の信仰が起こり、それらはまたこの地方を開拓した共同体の祖先神として祀られるようになる。古くから阿蘇谷の土地神（土地の主）として祀られてきた手野の地に、これらの神々も祀られるようになり、やがて国造神社となる。」¹¹

と述べ、そしてその国造神社の境内に末社として祀られている鯰社について、下記のように結論付けている。

「私はこの鯰社（に祀られる鯰）こそ、国造神社成立以前の手野（ひいては阿蘇谷全体）の土地の主、すなわち「地主神みたいな、神社以前の土着神—おそらく土地の精霊」（柳

田ほか・一九六五、二六、折口発言)であると思う。柳田国男は末社を三つに分類し、その一つとして、「地主神または伽藍神、神社がそこに建つ以前からその土地を支配していた神または霊に、優位を与えてなお将来の援護を求めるもの」(柳田ほか・一九六五、二八、柳田発言)をあげた。この柳田・折口説に示唆を受け、私は国造神社成立以前にここ手野の地に阿蘇谷の土地神が祀られており、それは鯰(もしくは大魚)の姿をして表現される、人態化される以前の荒ぶる土地の精霊(土地の主)であったと思う。』¹²

国造神社は、熊本県阿蘇市一の宮町手野に鎮座してる【図3】。紀元581年(社殿造営寛文12年)に鎮祭され歴史も古い。その末社にある鯰宮の祭神は大鯰の霊【図4】である。国造神社を含め阿蘇神社では、鯰をとることを固く禁じられている。皮膚病のナマズハダに霊験があり、今でも全快すると鯰の絵を描いて、神社に奉納する風習が残っている。

半田隆夫氏は、阿蘇開拓の祖神と伝えられる健甞龍命ほか十二神を祭る阿蘇神社は、古くから農業神として篤く尊崇され、伝わる神事も農耕と深く結びついているとして、下記のように述べている。

「現代における阿蘇神社の末社は、熊本県内が一番多く、四六一社を数え、特に城北地方に密度が高い。また、九州では、阿蘇と境を接する大分三十二社、宮崎五社、福岡が八社、長崎に四社鎮座する。四国地方では愛媛県に一社しかないが、中国地方では、鳥取・岡山・兵庫の三県に五社、近畿・東海では、三重、静岡両県に三社、関東では、東京・千葉・埼玉・栃木に各一社、さらに東北青森に一社、合わせて五二四社の鎮座が知られている。各地に点在する阿蘇神社に残る鯰信仰は、阿蘇の神話と鯰の



【図3】鯰宮(国造神社末社)



【図4】大鯰の霊

宗社鯰宮に、その起源がある。」¹³

このように、鯰信仰は、阿蘇信仰と同義ともいえる部分が多い。さすれば、阿蘇系の神社以外の神社や地域についての鯰信仰は、一体どのような信仰なのだろうかという疑問が残る。

二、鯰にまつわる石造物の所在地域と年代

次に、現代における鯰にまつわる石造物の所在地域と年代を詳細に把握したい。

方法として、書籍、文献の集計結果を元に、鯰をモチーフとした石造物の実見調査（2016年4月～2017年9月）を行った【表1】（NO.1～50）¹⁴。鯰にまつわる石造物には、地域特有の言い伝えに付随していることが多い。そのため、鯰にまつわる民話・伝説・俗信の集計結果を3種類に区分した。民話は、民衆によって伝えられてきた物語を集め、伝説については、実際に存在する地名や人名、寺社名等のあるものを全て集めた。そして俗説は、比較的根拠のないその土地にまつわる言い伝え、全113話を集めた。¹⁵また、新たに収集した文献¹⁶を合わせた合計192話の中から、鯰にまつわる石造物を抽出し、実見調査により新しく得た石造物の所在掲載文献（下記に記す）を足し、総計50件において検証していく。

実見調査を行った寺社や地域は計50件であり、宮城県、群馬県、栃木県、茨城県、千葉県、埼玉県、東京都、静岡県、長野県、石川県、滋賀県、三重県、奈良県、京都府、大阪府、島根県、山口県、愛媛県、香川県、徳島県、佐賀県、福岡県、熊本県、鹿児島県の24県が対象の県である。その結果を下記の表にまとめ、由縁などから鯰の表象を探るべく分類をしていく。

三、石造物の分類

次に、鯰にまつわる石造物の種類は、6種類（①地藏②要石③眷属④神⑤伝説⑥その他）に区分されると考えられる。なお、茨城県の鹿島神宮には要石と大鯰の碑、三重県の大村神社には要石と水かけなまず、福岡県の大森宮には鯰の石像が2基あるため、総計53件とする。下記に詳細を記す。

①地藏

地藏—7件

【表1】鯰にまつわる石造物所在表

No.	県	石造物及び寺社名・地名	種類	石造物の制作年・確認年	由来
1	宮城	鹿島神社	要石	寛永17年頃	地震除け、国を鎮める
2	宮城	鹿島香取神社	要石	元和6年頃	地震除け
3	群馬	なまずさん(雷電神社)	石仏	昭和60年	地震除け
4	栃木	巴波の鯰モニュメント	記念碑	平成4年	伝説
5	茨城	磯部稲村神社	要石	縄文・弥生時代と鎌倉時代末期の2説	地震除け
6	茨城	鹿島神宮	要石・記念碑	要石一神武天皇元年・大鯰の碑ー平成14年	地震抑え
7	千葉	香取神宮	要石	貞享元年以前	地震抑え
8	埼玉	田中神社	要石	平安時代以前	地震除け
9	埼玉	鯰モニュメント(吉川)	記念碑	平成7年	村おこし
10	東京	豊鹿島神社	要石	慶雲4年	地震除け
11	東京	八王子	要石	弘仁時代	地震除け
12	東京	鯰モニュメント(なまず広場)	記念碑	平成8年	地震除け
13	静岡	要石神社	要石	寛永年間	地震除け
14	長野	武高国神社	要石	弘化4年	地震除け
15	石川	八王子大権現社	要石	昭和初期	地震除け
16	石川	大穴持像石神社	要石	文久3年以前	地震抑え
17	石川	重蔵神社	要石	明治時代以前	地震除け
18	滋賀	藁園神社	記念碑	平成9年	五穀豊穡・災難除け
19	滋賀	鯰江弁天(松雲寺)	地蔵	平安時代	降雨祈願
20	三重	大村神社	要石・記念碑	要石一神護景雲元年・水かけなまず、なまず池ー昭和51年	地震除災
21	奈良	ナマズ地蔵	地蔵	天文10年	皮膚病
22	奈良	明日香村	亀石	不明	標石、伝説、禁忌
23	京都	今宮神社	壁	宝永時代以降	眷属
24	京都	弁天堂(神泉苑)	瓦	不明	眷属
25	京都	退蔵院(妙心寺)	瓦	平成21年	瓢鮎図
26	京都	桑田神社	手水舎	平成11年	眷属
27	大阪	鯰地蔵尊	地蔵	元禄時代	皮膚病
28	島根	長浜神社	要石	不詳	地震沈め
29	島根	出雲市国富町本佐邸	要石	天平5年	地震沈め
30	山口	鯰和尚	記念碑	平成4年	伝説
31	愛媛	鹿島神社	要石	天明88年以前	地震抑え
32	愛媛	鯰と瓢箪	記念碑	平成7年	地震除け
33	香川	鯰の歌碑(阿波市)	記念碑	文久2年	歌碑
34	香川	なまず岩(若林神社)	岩	万寿5年~長元10年	伝説
35	徳島	鯰神社(吉野川市)	地蔵	嘉永6年以前	伝説、地震しずめ、禁忌
36	佐賀	なまず様(豊玉姫神社)	陶磁器	平成12年	眷属、美肌、禁忌
37	福岡	大森宮	鯰の石像・記念碑	拝殿前の鯰石造物ー不明・記念碑ー平成7年	皮膚病、眷属、伝説、禁忌
38	福岡	癩堂(普光寺)	仏	昭和41年以前	病気回復、皮膚病回復
39	福岡	鯰石(筑紫野市)	石	慶応4年	降雨祈願、雨乞い、伝説
40	福岡	杷木 阿蘇神社	鯰の石像	大正4年	皮膚病、眷属、禁忌
41	福岡	海津 阿蘇神社	石灯籠2対	昭和25年・明治41年	地震除災、皮膚病、阿蘇神話
42	福岡	田主丸 阿蘇神社	鯰石像	昭和10年	雨乞い祈願、禁忌、皮膚病、地震除災
43	熊本	鯰宮(国造神社)	大鯰の霊	欽明天皇10年	伝説(阿蘇神話)、神、禁忌、皮膚病
44	熊本	鯰塚(山出神社)	塚	久寿2年	伝説
45	熊本	乙姫神社	鯰の石像	天保10年	眷属、疱瘡、禁忌、夫婦円満、子孫繁栄
46	熊本	年禰神社	石絵馬	寛永8年	水神鯰
47	熊本	太刀緒阿蘇神社	鯰の石像	昭和9年	皮膚病、禁忌、伝説
48	熊本	遥拝阿蘇神社	手水舎	平成11年	皮膚病、禁忌
49	鹿児島	阿吽の仁王像(天之御中主神社)	地蔵	明治以前	眷属、皮膚病、禁忌
50	鹿児島	南方神社	地蔵	享保年間	皮膚病、安産

滋賀県の松雲寺境内「鯰江弁天」¹⁷、奈良県の香芝市にある「ナマズ地蔵」¹⁸、大阪府の八尾市にある「鯰地蔵尊」¹⁹、徳島県の吉野川市にある「鯰神社」²⁰、福岡県の普光寺境内「癡堂」²¹、鹿児島県の天之御中主神社「阿吽の仁王像」²²、鹿児島県の南方神社「地蔵」²³

② 要石—17件 由縁は無論全てが地震除けである。(【表2】参照)

宮城県の鹿島神社・鹿島香取神社・茨城県の磯部稲村神社・鹿島神宮、千葉県の香取神宮、埼玉県の田中神社、東京都の豊島神社・八王子、静岡県のに要石神社、長野県の武高國神社、石川県の八王子大権現社・大穴持像石神社・重蔵神社、三重県の大村神社、島根県の長浜神社・出雲市国富町木佐邸、愛媛県の鹿島神社

③ 眷属—13件

京都府の宗像社(今宮神社)の壁に彫った鯰・弁天堂(神泉苑)の瓦・退蔵院(妙心寺)の瓦・桑田神社の手水舎、佐賀県の豊玉姫神社の白ナマズ様²⁴、福岡県の大森宮の鯰石像(2基)²⁵・杷木阿蘇神社の鯰石像・海津阿蘇神社の石灯籠2対・田主丸阿蘇神社の鯰石像、熊本県の乙姫神社の鯰石像・太刀緒阿蘇神社の手水舎・遥拝阿蘇神社の手水舎

④ 神—4件

三重県の大村神社「水かけなまず」、佐賀県の豊玉姫神社「なまず様」、熊本県の国造神社境内「鯰宮」、年禰神社「石絵馬」²⁶

⑤ 伝説—7件

群馬県の雷電神社「なまずさん」²⁷、滋賀県の藁園神社「なまずの石像」²⁸、奈良県の明日香村「亀石」、山口県の「鯰和尚」²⁹、香川県のなまず岩(若林神社)³⁰、福岡県の鯰石(筑紫野市)³¹、熊本県の山出神社飛地「鯰塚」³²

⑥ その他—5件

茨城県の鹿島神宮「大鯰の碑」³³、栃木県の巴波の鯰モニュメント、東京都池袋（なまず広場）の鯰モニュメント、愛媛県の鯰と瓢箪モニュメント、香川県阿波市の鯰の歌碑

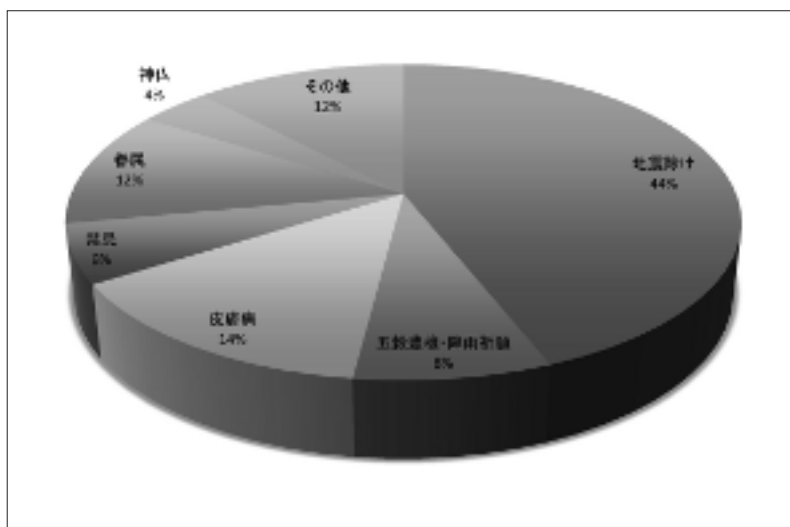
次に、石造物の由縁を区分けした結果を提示する【図5】。

本調査において、石造物には、鯰の形をした石造物、石仏、記念碑、石絵馬、手水舎、記念碑（素材は陶磁器など石材以外も含む）の他に、鯰の形態を彫った壁、瓦、石灯籠、また、「ナマズ」の名称のみ使われた地蔵、石仏、塚、歌碑、地震抑えの要石と多種類に及んでいる。

区分けとしては、50件（上記のように、茨城県の鹿島神宮には要石と大鯰の碑、三重県の大村神社には要石と水かけなまず、福岡県の大森宮には鯰の石像が2基あるが、由縁が同様であることから1件に纏めている）の鯰信仰のある石造物の主な由縁として、地震除け（抑え、除災含む）22件、五穀豊穡・降雨祈願4件、皮膚病7件、禁忌（祟り）3件、眷属6件、神仏2件、その他（村おこし・記念・伝説・標石・供養）6件の七種類に区分した。³⁴約4割強が鯰を表象する「地震」が由縁であることが分かった。

四、石造物と鯰信仰に関する考察

五来 重氏は、日本人がギリシャ人やローマ人のように人体の美を石で表現することがなく、仏像や神像のような宗教的表現にだけ石を用いたその原因として、「石には神や仏



【図5】鯰にまつわる石造物の由縁図

や霊の魂がこもっているというアニミズム（靈魂崇拜）が発達していた]³⁵という点を挙げている。また、石に靈魂の実在を認めた日本人は、石造宗教文化の例として、至る所に石の宗教遺物と遺跡を残した。これらはみな宗教的シンボルを表現したもので、これを見る人に宗教感情と信仰を伝達することができるという。そして、その宗教の対象や象徴には、以下の四つがあると述べている。

1. 自然の石をそのまま手を加えずに崇拜対象する 2. 自然石を積む、列や円環状に配列等の宗教的シンボルや墓にする 3. 仏像や神像のような宗教的表現にする 4. 石面に文字や絵を彫る

それを踏まえ、鯰にまつわる石造物の種類を①地蔵②要石③眷属④神⑤伝説⑥その他の6種類に分類した。その結果、鯰信仰は、阿蘇信仰だけを指すものではないことが臆げながら浮かび上がってきた。（「⑥その他」の栃木県の巴波の鯰モニュメント、東京都池袋「なまず広場」の鯰モニュメント、愛媛県の鯰と瓢箪モニュメント、香川県阿波市の鯰の歌碑5件は地域振興の役割を担う面が強く信仰度が薄い。茨城県の鹿島神宮「大鯰の碑」についても、記念碑のため含まない。）

まず、①の地蔵は、滋賀県の松雲寺「鯰江弁天」、奈良県香芝市の「ナマズ地蔵」【図6】、大阪府八尾市の「鯰地蔵尊」、徳島県吉野川市の「鯰神社」、福岡県の普光寺境内にある「癩堂」、鹿児島県の天之御中主神社「阿吽の仁王像」、鹿児島県の南方神社「地蔵」の7件である。本調査では、地蔵の確認が不可能だった寺社や祠もあり、全てが地蔵の形を成すものではないが、それぞれ鯰に所以がある。奈良県の「ナマズ地蔵」、大阪府の「鯰地蔵尊」、徳島県の「鯰神社」、福岡県の「癩堂」、鹿児島県の「阿吽の仁王像」には、かつて皮膚病祈願やその御礼に鯰を描いた絵馬が奉納されていたという。³⁶また、滋賀県の「鯰江弁天」は、降雨祈願、そして鹿児島県の「地蔵」は皮膚病の神様であり、ナマツ（皮膚病）ができた人は、早く治るように願をかけ、治ったときは、お礼として、そばの「諏訪池」に鯰を放流する慣わしがある。³⁷

民俗学者の岩井宏實氏は、地蔵に対する庶民の信仰はきわめて厚く、そのまつられ方は様々で、その御利益も多岐多彩であることを述べている。もともと地蔵は仏教という一菩薩で、梵名を「クシティガルババ」あるいは「クシャーハラナ」という。「クシティ」は大地・地霊を意味し、「ガルババ」は童児・胎児・神児を意味するというが、日本では平安時代後期に末法思想がひろまり、土信仰が台頭してより、地蔵信仰が貴族のあいだにひろまった。そして中世にかかるころから、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ姿に一定するようになり、地蔵は現実界と冥界の境に立って、冥界に行くものを救ってくれるという性格が強調されたという。また、子供というのは未成熟な靈魂であるという。「人の靈魂は他

界から現実界にやってきて、幾段階もの通過儀礼を経て、この世の人間として成長するのであるが、子供はまだ初期の段階なので、その靈魂は不安定で、いつなごき再び他界に引き込まれるかもしれない。そうしたとき、冥界と現実界の境に立って子供を救ってくれるのだというのである。」とし、今日伝えられる伝説のなかに、地蔵が童形に化身して苦難を救ってくれたという話が多いように、地蔵はとりわけ子供の安泰を守ってくれるという信仰が普及し、そこから庶民のあいだに地蔵信仰が広く受け入れられるにいたったという。³⁸かつて九州地方から江戸の地域の人々が、癩病により「我が子の健康を祈った」という点で皮膚病の悩みを持つ親のすがる信仰の形に、鯰絵馬も含まれていた。

このように地蔵に関していえば、阿蘇信仰に該当するものは見受けられず、ナマツと呼ぶ（主に子供に向けた）皮膚病に靈験のある信仰と捉えられる。

②の要石17件についてだが、宮城県の鹿島神社、茨城県の磯部稲村神社・鹿島神宮【図7】、千葉県の香取神宮、埼玉県の田中神社、東京都の豊鹿島神社・八王子、静岡県の要石神社、長野県の武高國神社、石川県の八王子大権現社・大穴持像石神神社・重蔵神社、三重県の大村神社、島根県の長浜神社・出雲市国富町木佐邸、愛媛県の鹿島神社は、要石の由縁の全てが地震除けである。これは、地下にもぐった鯰が暴れたために起きた地震を、要石が抑えているという要石信仰である。

③の眷属13件についてだが、京都府宗像社の弁天堂の瓦・退蔵院の瓦・桑田神社の手水舎、佐賀県豊玉姫神社の「白ナマズ様」、福岡県大森宮の鯰石像・杷木阿蘇神社の鯰石像【図8】・海津阿蘇神社の石灯笼・田主丸阿蘇神社の鯰石像、熊本県の乙姫神社の鯰石像・太刀緒阿蘇神社の手水舎・遥拝阿蘇神社の手水舎は、下記のように信仰の区別ができる。退蔵院は瓢鮎図にちなんでいるが、宗像社、桑田神社の祭神は、市杵島姫命（弁財天）、豊玉姫神社、大森宮の祭神は、豊玉姫大神であり両神とも海神であることから、鯰は眷属としている。そして、杷木阿蘇神社、海津阿蘇神社、田主丸阿蘇神社、乙姫神社、太刀緒阿蘇神社、遥拝阿蘇神社は阿蘇信仰である。

④の神4件についてだが、三重県の大村神社は大村の神（地震除災の大神）、佐賀県の豊玉姫神は鞍置鯰信仰、熊本県の国造神社「鯰宮」は大鯰の霊、年禰神社は水神³⁹として、独自の神を祀っている。阿蘇信仰は熊本県の国造神社「鯰宮」は大鯰の霊のみである。

最後に、⑤の伝説7件についてだが、これらはその土地特有の鯰にまつわる伝説に、付随した形で信仰されているのが特徴である。

先の五来氏は、自然石崇拜ではその石の形が異常であったり、仏や神や動物に似ていたりするので、崇拜の対象になることが多いとし、このような絶対帰依の感情を、聖なる動物に対しても聖なる木や石に対しても起こし得るのが、日本人の庶民信仰なのであると述

べている⁴⁰が、これら7件のうち、奈良県明日香村の「亀石」、香川県若宮神社の「なまず岩」、福岡県の「鯰石」はそれに当てはまるであろう。群馬県雷電神社の「なまずさん」、滋賀県藁園神社の「なまずの石像」【図9】、山口県の「鯰和尚」、熊本県山出神社の「鯰塚」は、その土地独自の伝説に基づいた信仰がある。

従って、阿蘇信仰は、杷木 阿蘇神社、海津 阿蘇神社、田主丸 阿蘇神社、乙姫神社、太刀緒阿蘇神社、遥拝阿蘇神社、国造神社の50件中7件と想像以上に、阿蘇信仰による鯰への信仰が垣間見えることがほぼ皆無と思われる。先にも述べたように、1753年に上演された「暫」にて、竹熊入道という名で鯰坊主が現れたことから、恒常的に地下の鯰が暴れて地震を起こすという俗信が、庶民の意識に深く植えつけられていたことを明示している。鯰にまつわる石造物所在表【表1】や鯰にまつわる石造物の由縁図【図5】からみても、鯰にまつわる石造物については、鯰信仰というより、石そのものに霊が宿るアニミズム信仰（主に地震除け）が、その地域にまつわる鯰伝説と結びついたらと捉えることができるであろう。



【図6】奈良県香芝市「ナマズ地蔵」



【図7】鹿島神宮「要石」



【図8】杷木 阿蘇神社「鯰石像」



【図9】藁園神社「なまずの石像」

五、鯨にまつわる祭を執り行う地域と年代

鯨にまつわる祭を執り行う地域は、京都、岐阜県、三重県、滋賀県、兵庫県、熊本県の6県11件となった。東京都の神田明神（神田祭）の1件、岐阜県の片山 八幡神社（祭礼）、大垣 八幡神社（大垣祭り）【図10】、藁園神社（ナマズマツリ）、白髭神社（綾野祭り）の4件、三重県の大村神社（秋祭り）【図11】の1件、滋賀県の三輪神社（どじょうまつり）【図12】の1件、兵庫県の石上神社（なまずおさえ神事）の1件、熊本県の若宮神社（通しもん）【図13】、小島阿蘇神社（祭礼）、井口八幡神社（川なまず）の3件と計11件であることが確認された結果となった【表2】。



【図10】大垣 八幡神社(大垣祭り)



【図11】大村神社（秋祭り）



【図12】三輪神社（どじょうまつり）

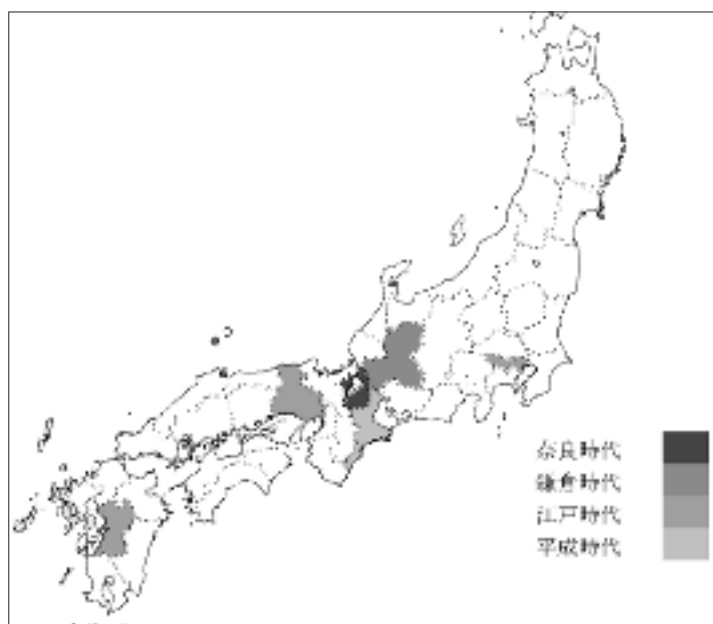


【図13】若宮神社（通しもん）

祭りの由来だが、神田明神（神田祭）は、地震除け、片山 八幡神社（祭礼）は雨乞い・鯰への感謝、大垣 八幡神社（大垣祭り）は瓢鮎図・災害除け、薬園神社（ナマズマツリ）は五穀豊穡・災害除け、白鬚神社（綾野祭り）は五穀豊穡、大村神社（秋祭り）は地震守護、三輪神社（どじょうまつり）は人身御共、石上神社（なまずおさえ神事）は神宝奪還伝承・自然崇拝、若宮神社（通しもん）は五穀豊穡と鯰への感謝、小島阿蘇神社（祭礼）については阿蘇信仰（鯰への感謝）、井口八幡神社（川なまず）については自然崇拝（水への感謝）である。また、地域の所在を年代別（鎌倉、鎌倉、江戸、平成時代）に分類した【図14】。⁴¹

【表2】鯰にまつわる祭を執り行う寺社表

No.	県	寺社名	祭名	種類	祭の発祥年	由来
1	東京	神田明神	神田祭	曳き物	寛政3年以前	地震抑え
2	岐阜	片山 八幡神社	祭礼	鯰軸	寛永年間以降	雨乞い・鯰への感謝
3	岐阜	大垣 八幡神社	大垣祭り	鯰軸	慶安元年	瓢鮎図・災害除け
4	岐阜	薬園神社	なまずまつり	鯰軸	正嘉2年・正保3年の2説	五穀豊穡・災害除け
5	岐阜	白鬚神社	綾野祭り	鯰軸	宝暦9年以前	五穀豊穡
6	滋賀	三輪神社	どじょう祭り	ナレズシ	天平16年	人身御供
7	三重	大村神社	秋祭り	鯰軸	平成3年	地震守護
8	兵庫	石上神社	なまずおさえ神事	相撲	文化6年	神宝奪還・自然崇拝
9	熊本	若宮神社	通しもん	鯰鉦	享保17年	五穀豊穡・鯰への感謝
10	熊本	小島阿蘇神社	祭礼	鯰神輿	昭和時代	鯰への感謝
11	熊本	井口八幡神社	川なまず	食	昭和23年以前	自然崇拝



【図14】鯰にまつわる祭を執り行う地域の年代別表

六、「神田祭礼絵巻」にみる祭と鯰信仰

上記の検討結果に加え、以下、前掲の「神田明神祭礼絵巻」との比較を行いたい。本絵巻は、寛政3（1791）年以前頃の神田明神の祭礼を描いた絵巻である。山崎輝子氏より龍ヶ崎市歴史民俗資料館に寄贈されたもので、黒田日出男氏が共同研究者のロナルド・トビ氏とともに発見し1992年に「新発見の天下祭り絵巻—龍ヶ崎市立歴史民俗資料館所蔵「神田明神祭礼絵巻」の紹介—」（『龍ヶ崎市史研究』第6号）⁴²の中で紹介したという。

黒田氏が紹介した、龍ヶ崎本「神田明神祭礼絵巻」（以下「龍ヶ崎本」）の現状と形状についてまとめると、下記のようなことになる。

- ・龍ヶ崎本はもと二巻の卷子に仕立てられ、簡単な裏打ちが施されていたのだが、現状は、十三の部分（見返しと軸を除く）に切断されており、それらの切断部分には後述するような割り印が捺されている。
- ・五つに区分され、それぞれ巻いて紐で簡単に縛ってある。それぞれが祭礼の順序になっており、錯簡は見られない。
- ・縦がほぼ二六・五センチメートルであり、横幅は総合計すると、約四二九六・八センチメートルの長さになる。⁴³

神田明神の神田祭については、地震抑えの由来がある。先述のように、平成17年（2005）には、神社が主体となり災害除けと防災意識の喚起祈願に誕生した曳き物「鯰と要石」が復活した【図15】。本絵巻をもとに再現されたこの曳き物は、江戸時代に実際に存在していた「大鯰の山車」から着想を得ているという【図16】。



【図15】「鯰と要石」山車



【図16】「神田明神祭礼図 下巻（模本）」
江戸時代_寛政3年(1791)（東京国立博物館）

江戸時代、神田明神の祭礼・神田祭が江戸城内へ入るということは、一般化した習わしであり、弘化4～嘉永5年には、歌川芳艶が「神田明神御祭禮の図」を描いていることから、それを伺うことができる【図17】。



【図17】 歌川芳艶「神田明神御祭禮の図」弘化4～嘉永5年（江戸東京博物館）

また、この絵巻に描かれた「鹿島踊」とは、鹿島神宮の信仰を持ち歩いた集団で行う民俗歌舞のことである。江戸時代に喜田川守貞によって書かれた『守貞謾稿』には、下記の記載がある【図18】。

「また昔は鹿島踊りと云ふ者ありし由。『世事談』に曰く、寛永の頃、諸国に疫病あり。常陸国鹿島の神輿を出して、所々にこれを渡し、疫難を祈らしめ、その患を除く。因つてこれを謹んで踊らしむ。世俗鹿島おどりと云ひて諸国流布す。」⁴⁴



【図18】 喜田川守貞筆『守貞謾稿』より（からす萬度を持つ男）⁴⁵

岩水氏は、鯰を先導している人々の格好から、【図19】「鹿島踊」に基づいて作成されたものであり、特に鯰絵の「鹿島恐」【図20】との関連性を述べている。⁴⁶

鯰絵とは、安政2年(1855)に江戸で起きた大地震時に大流行した錦絵のことである。「地底に住む大鯰が地震を起こす」という俗信及び民間信仰に基づいて作成されている。

鯰絵「鹿島恐」は、「鹿島踊りをかりて作られているが、その鹿島踊は、鹿島の事触れが年頭にその年の吉凶を占い全国を触れ歩いた事に始まり、やがて正月の門付芸になり、歌舞伎の所作事にも取り入れられたものである。画面中央に、白の浄衣に鈴と鳥万燈を持つ事触れの姿をもじって、鈴と兎の描かれた万燈を手にした鯰が立っており、その周囲で職人や閻魔の子が踊っている。左端の歌は、世直しの地震がおさまり、新しく復活した社

会には素晴らしい将来が約束されていると述べている。』⁴⁷とあるように、詞書に「世直しの地震はいつしか跡もなくよき事ふれのかしましきかな」とある【図21】。

鯰絵が、未曾有の災害により打ちひしがれていた民衆の意識から、世直しの風潮へ変化させることに一躍買ったことは、各研究者によって明らかにされてきた。その中の一人である若水氏は、当時『神田明神祭礼図』に見られた鯰の練物や鹿島踊が、熱狂的な天下祭りに実際に行われ、それが江戸中の人々の目に強く印象付けられ、親しまれていた現実があったとした上で、「この安政大地震時に際して、この鹿島縁の原要石説話に対する過去の信仰心が、地震を機に息を吹き返し、それが改めて鯰絵作者達の脳裏に蘇ったのではなく、むしろ各説話が常に江戸戯作者をはじめ、多くの人々の視覚に存在していたと考えるべきである」と述べている。⁴⁸

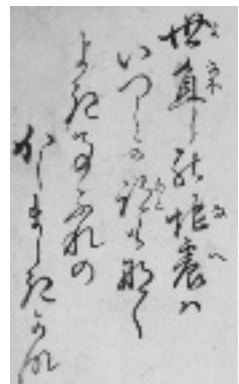
鯰絵は「地底に住む大鯰が地震を起こす」という民間信仰が根底として作られている。歴史を遡れば1592年に天正地震を体験し大阪へ避難した秀吉の「ふしみのふしなまつ大



【図19】三本足の鳥の絵が描かれた万灯を持った男【図1】『神田明神祭礼図』拡大図



【図20】鯰絵「鹿島踊」国立国会図書館（1855）



【図21】「世直しの地震はいつしか跡もなくよき事ふれのかしましきかな」【図20】「鹿島踊」の一部拡大図

事にて候のまま、いかにもへんとうにいたし可申候間」と書かれた伏見城普請の書状に端を發し、1753年の歌舞伎「暫」の「おれが今この髭をちっとばかり動かすと、この秋のような地震がするぞ」の台詞から、その当時の江戸庶民に根付いた意識だということが周知されている。したがって、寛政3年（1791）頃『神田明神祭礼図』に要石が鯰を抑える構図があっても不思議ではない。

他寺社の祭りの由来であるが、片山八幡神社の祭礼、白髭神社（綾野祭り）、大垣八幡神社（大垣祭り）は歴史が古く、赤い頭巾をかぶった老人が、瓢箪で鯰を抑える様子を伝えていることは共通しているが、それぞれに雨乞いや五穀豊穡、瓢鮎図、災害除けとばらつきがあり、鯰やまのイメージに違いがある。藁園神社のなまずまつりも歴史が古い。正嘉二年の大地震をとまなう大雨がつづき洪水となったときに「大なまず」を退治したところ、天気が回復した。大喜びして舞をおどり、そのなまずを地中に祀ったところ地震がおさまったという説と、正保三年の農作物に害虫が異常発生した際、害虫駆除の祈願をしたところ、「なまず」が害虫を食いつくしたので、祭典をおこない神前に舞楽を奏した説の2説がある。三輪神社（どじょうまつり）は、人身御供を献上し鯰の酢を供える千数百年続いている祭りである。石上神社（なまずおさえ神事）は、由来に関する伝承は根拠をあきらかにし得ないが、神宝奪還伝承のほか、昔から地震が地域につき、加古川の氾濫が絶えなかったことから、その流れを止める意味があるため自然崇拜の意味が強いという説もある。発祥年についても諸説あり、文化6年⁴⁹と記した文書が最も古いとしている。若宮神社（とおしもん）は、洪水で流された御祭神を迎えに行った範囲を昔を偲んで神のお帰りをお祝いする祭である。小島阿蘇神社は室町時代から、大村神社は奈良時代から、と両神社とも鯰との関わりが古い。しかし、祭りに使う鯰山車や神輿については、地域活性化の要素が強く、寺社と地域の人間によって創り上げているため、祭りの歴史が新しい。阿蘇信仰に該当する寺社は小島阿蘇神社のみであり、祭りには直接的に関わりがないと捉えられる。井口八幡神社（川なまず）については、2、3年前から行われていないという。⁵⁰

先に述べた「神田明神祭礼絵巻」には、地震を抑える役割を鯰がしているという要石信仰に基づき、「要石と鯰」が描かれているが、石造物と絵巻を体系的に検証することによって、鯰とその信仰との因果関係を解明することが可能だと思われる。今後はさらに詳細に絵巻との検討を進めていきたい。

おわりに

日本において石器時代から岩石に対する感謝の念から畏敬・信仰にまで高められていく

ことはきわめて自然なことであると『石神信仰』（大護1977）⁵¹に記述があるように、それぞれの石造物にはその土地にまつわる信仰が伝承され、また、祭りにおいてもその地域にまつわる歴史や災害などの伝承から行なわれていると把握することができた。

鯰信仰とは、阿蘇信仰との関わりが密接であり、同義のものと仮定したが、鯰にまつわる石造物と鯰にまつわる祭を執り行う寺社計61件において、阿蘇信仰の割合は、15%にも満たないことが判明した。ときに鯰は、「鯰は、普段、池底で生活しているが、梅雨期になると、産卵のため浅瀬に上がってくる。雄が、雌の胴体にクルッ、クルッと巻きつき、産卵を助けるので、安産祈願・子宝祈願・子孫繁栄として鯰を信仰する」⁵²という、その生態から信仰されている寺社もある。鯰信仰には、阿蘇信仰のほか、水の神、自然崇拜、鞍置鯰、伝説鯰、皮膚病の神、雨乞いの神、五穀豊穡の神、天変地異予兆の魚、そして、地震の象徴とすべてが含まれている。つまり、鯰信仰とは、阿蘇信仰はもちろん、その土地にまつわる信仰や伝説や習慣が語り継がれ、その結果「鯰信仰」となったという結論に集約できる。また、「鯰＝地震」のイメージが根底にあった上で、各地域に降りかかった自然災害やそれを教訓にした信仰や祈りが生まれた。その形が鯰の石造物に祈願をかけるという信仰となり、祭りを行う事で、過去への感謝と未来への希望を託す伝承となったのであろう。

以上、本稿に示したように、鯰にまつわる石造物と祭における全国現地調査を体系的に検証することによって、江戸から現代にかけての鯰信仰や祭礼、さらには地震などの災害に対する庶民の意識などの変化を捉えることができると考える。⁵³

- 1 気谷誠2008「鯰坊主考」『鯰 イメージとその素顔』八坂書房 pp.12-13
- 2 細田博子『鯰絵と鯰の民俗』2012早稲田大学卒業論文にて、鯰絵の系譜、日本全国のナマズにまつわる民話・伝説・俗信113話を分析し、「「鯰は地震を起こす」という俗信は、地方から江戸へ伝えられた」という仮説について検証した。
- 3 細田博子2017「ナマズ絵馬に込められた病平癒について―癩病の表象―」『國學院雑誌』國學院雑誌広報課 pp.79-104
- 4 黒田日出男1993「天下祭り絵巻の世界―龍ヶ崎市歴史民俗資料館所蔵「神田明神祭礼絵巻」―」『王の身体王の肖像』p126
- 5 堀内研一「鯰の石絵馬」『大津歴史こぼれ話』2006明日の観光大津を創る会 pp.56-57、中嶋敬介「「おとぼうなまず」の背景」『ふるさと 第80記念特大号』甲佐町文化協会 pp.25-27
- 6 佐藤征子1998『一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書①神々と祭の姿』一の宮町 pp.9-10 この健磐龍命の開拓神話と地名伝説は江戸時代中期の『肥後國誌』に収録されている。

- 7 隈 昭志1999『一の宮史 自然と文化 阿蘇選書①長目塚と阿蘇国造』一の宮町 pp.81-82
- 8 熊本日日新聞社編集局編1987『新・阿蘇学』 p.41
- 9 佐藤、前掲 p.16
- 10 「角川日本地名大辞典」編集委員会編1987『角川日本地名大辞典43 熊本県』角川書店 p.1295
- 11 村崎真智子1993『阿蘇神社祭祀の研究』法政大学出版局 p.20
- 12 同書 pp.542-543
- 13 半田隆夫1996『神神と鯰』私家版 pp.42-45
- 14 兵庫県石上神社については現地撮影は10月8日、文献資料及び聴聞調査は9月末迄に終えている。
- 15 有馬英子1983『阿蘇の大鯰』日本伝説体系・第14巻南九州編) みずうみ書房、荒俣宏1989『世界大博物図鑑』第2巻〔魚類〕平凡社、白井和雄1998「安政大地震と鯰絵」『東京連合防火協会』12, P.52, 305、尾島利雄1986『鹿島社の要石』日本伝説体系・第4巻南九州編) みずうみ書房、コルネリウス・アウエハント小松和彦〔ほか〕共訳1979『鯰絵-民俗的想像力の世界-』せりか書房、喜多川守貞1996『近世風俗志(一) 守貞謄稿』岩波文庫、坂田友宏1984『日本伝説体系』第11巻山陰編) みずうみ書房、滋賀県立琵琶湖博物館 編2003『鯰一魚と文化の多様性-』サンライズ出版、鈴木棠三1982『日本俗信辞典 動・植物編』角川書店、白井弘一・静岡県むかし話研究会1978「静岡のむかし話」日本標準1978、藤沢衛彦1955『日本民族伝説全集』第2巻 関東篇 河出書房、民俗学研究所1955『総合日本民俗語彙』第三巻平凡社、人見必大 訳注 島田勇雄1978『本朝食鑑3』平凡社、福田晃1988『鯰食わず』「日本伝説体系・第8巻北近畿編) みずうみ書房、福田アジオ2000『日本民俗大辞典』吉川弘文館、松下幸子2009『錦絵が語る江戸の食』遊子館、藤沢衛彦1955『日本民族伝説全集』第2巻 関東篇 河出書房、松本孝三1982『日本伝説体系』第12巻四国編) みずうみ書房、村崎真智子1993「阿蘇の大魚と鯰」『日本民俗学』(193) pp.188-191, 1993-02 日本民俗学 (193)、森 誠一2007「生き物文化誌としての「鯰」-三重県徳蓮寺の鯰絵馬から見えてくること」『ビオストーリー』8) から抽出。
- 16 朝倉治彦1992『神話伝説辞典』東京堂出版、網野善彦 1989『瓢箪論争』「いまは昔むかしは今 第1巻(瓜と竜蛇)」福音館書店、網野善彦〔ほか〕1993『精進魚類物語』「いまは昔むかしは今 第3巻(鳥獸戯語)」福音館書店、網野善彦1993『魚太平記』「いまは昔むかしは今 第3巻(鳥獸戯語)」福音館書店、網野善彦 1995『屋根裏の鯰』「いまは昔むかしは今 第4巻(春・夏・秋・冬)」福音館書店、安室知2003『漁・食・祭』「鯰一魚と文化の多様性-滋賀県立琵琶湖博物館 編」サンライズ出版、荒木博之〔ほか〕1983『阿蘇の大鯰・(類話)』日本伝説体系・第14巻南九州編) みずうみ書房、石上堅1983『日本民俗語大辞典』桜楓社、いすみ市民話集編集委員会2008『夷隅川の大ナマズ』「いすみの民話」いすみ市教育委員会、井田安雄〔ほか〕1986『鹿島社の要石・(類話)』「日本伝説体系・第4巻南九州編) みずうみ書房、池原昭治1993『日本の民話300』木馬書館、磯崎康彦2006『歌川国

芳論 二. 天保の改革と歌川国芳]「福島大学人間発達文化学類論集 4」福島大学人間発達文化学類、
 稲田浩二 [ほか] 1985『狐女房—聞き耳型 (類和 2)』「日本昔話通観 第 3 卷 (岩手)」同朋舎出版、
 稲田浩二 [ほか] 1985『犬と猫と宝物 (2)』「日本昔話通観 第 3 卷 (岩手)」同朋舎出版、稲田浩
 二 [ほか] 1982『五郎の欠け椀 (参考話)』「日本昔話通観 第 4 卷 (宮城)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほ
 か] 1982『頭が池 (類和 4)』「日本昔話通観 第 4 卷 (宮城)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1985『も
 の食う魚 (類和 1)』「日本昔話通観 第 7 卷 (福島)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1985『蛙の子
 は蛙』「日本昔話通観 第 7 卷 (福島)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1985『蛙の子は蛙』「日本昔話
 通観 第 7 卷 (福島)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1986『もの言う (類和 3) (類和 4) (類和 5) (類
 和 6)』「日本昔話通観 第 8 卷 (栃木・群馬)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1988『運定め (類和 1)』
 「日本昔話通観 第 9 卷 (茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1986『運
 のよい狐師』「日本昔話通観 第 10 卷 (新潟)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1986『もの言う魚 (類
 和 3)』「日本昔話通観 第 11 卷 (富山・石川・福井)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1981『なまずと
 くものけんか』「日本昔話通観 第 12 卷 (山梨・長野)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1980『大島と
 えび (類和 2)』「日本昔話通観 第 13 卷 (岐阜・静岡・愛知)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1980『も
 の言う魚 (類和 3)』「日本昔話通観 第 13 卷 (岐阜・静岡・愛知)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか]
 1977『なまずときじと火の粉』「日本昔話通観 第 14 卷 (京都)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1977『く
 も報恩』「日本昔話通観 第 14 卷 (京都)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1977『うどんなまず』「日
 本昔話通観 第 15 卷 (三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1978『三
 匹猿』「日本昔話通観 第 16 卷 (兵庫)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1978『なまずの夢判断』「日本
 昔話通観 第 16 卷 (兵庫)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1978『三匹猿』「日本昔話通観 第 17 卷 (鳥
 取)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1978『えびとなまずと大島』「日本昔話通観 第 17 卷 (鳥取)」
 同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1979『三匹の猿・(類話 1)』「日本昔話通観 第 19 卷 (岡山)」同朋舎
 出版、稲田浩二 [ほか] 1979『竹切り爺 (類話 12)』「日本昔話通観 第 19 卷」同朋舎出版、稲田浩二
 [ほか] 1979『果てなし話 (類話 5)』「日本昔話通観 第 19 卷」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1979『だ
 まされ狐 (類話 1)』「日本昔話通観 第 19 卷」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1980『恋の道』「日本
 昔話通観 第 24 卷 (長崎・熊本・宮崎)」同朋舎出版、稲田浩二 [ほか] 1980『なまず騒動』「日本昔
 話通観 第 24 卷 (長崎・熊本・宮崎)」同朋舎出版、今村明恒 1941『鯰のざれごと』三省堂、巖谷小波
 1978『鯰浄覚』「説話 大百科事典 第七卷」名著普及会、巖谷小波 1978『鯰の命乞』「説話 大百科事
 典 第七卷」名著普及会、江原絢子 2011『日本の食文化史年表』吉川弘文館、遠藤元男 [ほか] 1983『飲
 食 日本史小百科. 16.』近藤出版社、大口町教育委員会 2005『ナマズの清水』「大口町のむかしばなし」
 大口町歴史民俗資料館、小田輝吉 2005『おしょうなまず』「山口県の民話」偕成社、狩野敏也 1995『平
 成の鯰料理探訪』「鯰絵」里文出版、川上行藏 [ほか] 1990『日本料理由来事典. 中 (す〜わ)』同

朋舎、川上行蔵2006『食生活語彙五種便覧』岩波書店、小暮正夫2006『三川渚の大なまず』「日本の怪ぶつ話」偕成社、白鳥庫吉〔ほか〕1978『日本民俗文化体系〔9〕』小学館、鈴木棠三1982『日本俗信辞典』角川書店、坪井洋文〔ほか〕1995『日本民俗文化体系〔10〕』小学館、日本児童文学者協会2004『おしょうなまず』「山口の民話」偕成社、日本児童文学者協会2000『竹生島とナマズ』「滋賀県の民話」偕成社、日本児童文学者協会2000『ナマズ神のほこら』「徳島県の民話」偕成社、日本児童文学者協会2000『山下淵の大ナマズ』「長崎県の民話」偕成社、日本風俗史学会1989『図説江戸時代食生活事典』雄山閣、鈴木棠三1982『日本俗信辞典 動・植物編』角川書店、野村敬子2013『柳本伝承・ナマズの恩返し』〔柳本文化への誘い²⁵國學院大學〕下野新聞新書、野本寛一2011『食の民俗事典』柘風舎、野村純一〔ほか〕1984『多鯰が池（類話）』「日本伝説体系 第11巻山陰編」みずうみ書房、狹間町教育委員会2004『馬貝塚氏は、なまずに乗ってきた』「狭間町の伝統と民話 第2集」狹間町教育委員会、福田晃1988『鯰食わず』「日本伝説体系・第8巻北近畿編」みずうみ書房、福田晃〔ほか〕1982『次郎池の大鯰・（類和）』「日本伝説体系第〔12〕巻四国編」みずうみ書房、福田晃〔ほか〕1982『鯰住まず』「日本伝説体系第〔12〕巻四国編」みずうみ書房、福田アジオ2000『日本民俗大辞典』吉川弘文館、藤沢衛彦1956『鯰男』「日本民族伝説全集 第2巻」関東篇 河出書房、藤沢衛彦1956『要石と地震鯰』「日本民族伝説全集 第2巻」関東篇 河出書房、藤沢衛彦1971『図説 日本民俗学全集 第2巻』高橋書店、名著普及会1979『鯰の命乞』世界神話伝説大系、町田喜代美「巴波の鯰」2006『とちぎの民話シリーズ』スタディツアー55会、迷信調査協議会1980『地震とナマズの謎』「俗信と迷信」洞社、森浩一〔ほか〕1978『日本民俗文化体系〔14〕』小学館、宮田登〔ほか〕1995『日本民俗文化体系〔9〕』小学館、宮田登〔ほか〕1985『日本民俗文化体系〔11〕』小学館、民俗学研究所 a 1955『総合日本民俗語彙 第一巻』平凡社、民俗学研究所 b 1955『総合日本民俗語彙 第三巻』平凡社、柳田國男1970『総合日本民俗語彙 三巻』、山中清次〔下野民俗研究会〕2004『ナマズの恩がえし』「読みがたり 栃木のむかしばなし下野民俗研究会」日本標準、湯浅良幸2010『露田渚の白なまず』「阿波の民話 第3集」徳島新聞社、湯浅良幸2010『大蛇と大なまず』「阿波の民話 第3集」徳島新聞社、湯浅良幸2011『上大野の白ナマズ』「阿波の民話 第6集」徳島新聞社、湯浅良幸2012『杉森さんの白ナマズ』「阿波の民話 第9集」徳島新聞社、湯浅良幸2012『岩津の大ナマズ』「阿波の民話 第10集」徳島新聞社、湯浅良幸2013『川田のナマズ神』「阿波の民話 第13集」徳島新聞社、武者金吉1957『地震なまず』東洋図書、作者不詳1880『鯰退治筆之鉾権理』開成社、関沢紀1994『鹿島七不思議ものがたり なまズの石』新泉社、伊藤龍平2004『大鯰に遭った俳人の話—『雪窓夜話』冒頭話をめぐって』「國學院大學近世文学学会会報10」國學院大學近世文学会、國學院大學栃木短期大学口承文芸センター2005『大塚政和 述・巴波川のウナギとナマズ』『ナマズの恩返し』〔栃木：短大生が聴いたむかしむかし 星の環会〕を追加。

17 鯰江弁天は、松雲寺内にある。平安時代から降雨祈願に効験があると伝えられている。鯰江弁天は、

300年に一度開帳されるため拝観することはできない。兩童子像と関連付ける説もあり、その形姿からすれば、吉祥天像として造立された可能性もある。(根立研介1992『日本の美術第317号 吉祥・弁才天像』至文堂 pp.63-64)

- 18 ナマズ地蔵は、顔にナマズの出来た人や歯痛で悩む人がよくお参りしていたことから「ナマズ地蔵」と呼ばれるようになった。昔は、鯰の絵馬があった。(香芝市二上山博物館編1993「風渡る野辺の石仏」P.12,31) 千葉県立大利根博物館編1994「特別展「鯰百話」展示図録」p.21)
- 19 鯰地蔵尊は、擬灰岩製で元々は半跏相の地蔵だった。膝から下部分が鯰のように見えるのでこの呼び名がついたという。白なまずは皮膚病に効くといわれ、昔はなまずの絵を描いた絵馬が奉納されていた。(八尾市観光協会編2016『Yaomania vol.16』 pp.6-7)
- 20 鯰神社は、粟飯を盗み食いするナマズを懲らしめると女房が病になってしまったので祠を建てて大鯰を祀ったという話が伝わる。以前は「鯰」を描いた扁額が掛けてあった。安政南海地震(1854)以降、鯰は神格化され、地震の魔除けとして扱われるようになった。(武田明「川田の鯰神」『日本の伝説 16 阿波の伝説』1977角川書店、林博章「日本の建国と阿波忌部」2007私家版)昔から「鯰が暴れたから地震がおきたのだ、川(吉野)へ近づくな」といわれ続けたという。また、戦前戦時中、吉野川の魚を食べると鯰を食べたものだけが死んだため、それ以降鯰も食べない。
- 21 癒堂には霊水があり、病気回復、特に皮膚病回復にご利益があると伝えられている。「お線香、おロウソクを上げ、ご祈念の後、お飲みになられるか、患部に霊水をお付け下さい」(説明板)とあるように、流れている水を持ち帰る人は今もいるという。
- 22 天之御中主神社は、鯰が神様であり、以前は鯰の絵馬がたくさん掛けられていた。昔は池もあり鯰もたくさんいたという。阿吽の仁王像には手や鼻がないためそういった悩みを持つ人はさすると治るとされ、また全般的な病気にもご利益があるとされていた。
- 23 地蔵は、ナマツ(皮膚病)の神様と言われている。ナマツができた人は、早く治るようにこの神様に願をかけ、治ったときは、神様へのお礼として、道一つ隔てた広さ100平方メートルの「諏訪池」に鯰を放流する慣わしがあるという。(半田隆夫1999『神佛と鯰』私家版 pp.17-19)
- 24 石像ではなく陶磁器である。
- 25 「船岡山の戦い」の時に川面に大鯰が、鞍を背に置いて現れた時に、興光がその鯰に乗移り、対岸の本陣に無事帰り着き、家臣の手厚い看護を得て、一命をとりとめた伝説が残っている。社殿前に2基と鳥居前に1基ある。
- 26 鯰は、阿蘇の神話の中で水神として伝えられる。これは、移住から約100年経った宝永2年(1705)、今から310年程前、苦竹町の住人が、井手の保全を願って、水神鯰を納めた絵馬である。(大津町歴史文化伝承館・説明板)
- 27 雷電神社「なまずさん」は、なでると地震を除けて自信が湧き出ると親しまれている。

- 28 平成9年に応永起源600年祭時に、豊かで災害のない、生水の里を祈って設置された「なまずの石像」は、五穀豊穡を祈願している。(説明書)
- 29 清水沼と呼ばれる大きな沼にまつわる「鯰の化身」の伝説がある。「和商鯰」『周坊長門の伝説』1976山口県教育会 pp.172-177, 続防府市史刊行会編1960「鯰の化身」『続防府市史』 p.717
- 30 羽間と長尾の境にある鯰岩は、昔、土器川の流れが急流のこのあたりには、大なまずが住み、しばしば通行人をのんでいたという。その大きさは、頭はなまず岩に、胴は度々井に、尾は遠く乙井に達するほどの大なまずで、これを恐れた村人たちが、森の神に祈願し、神殿を建立、その神庭に若松を植えたところ、それ以来なまずは人をのまなくなったという民話が若林神社の縁起になった。まんのう町『まんのうすがた』2013弘栄社 pp.48-49
- 31 「むかしこのあたりは葦がおいしげる沼地だった。ある時ここを通りかかった菅原道真は、大鯰に道を防げられたので腰の刀を抜き斬ったところ不思議にも、この鯰が飛び散って三つ(頭・胴体・尾)の石になったと伝えられている。このことから“鯰石”という地名がいまなお残っている。(説明板)
- 32 鯰塚は、昔、肥後国甲佐郡津志田村の山出大武宮の山上に、源為朝が、ご内室と共に居城していたある日、為朝は、都へ上り、そのまま帰ってこなかった。途方にくれたご内室は、悲しみのあまり、緑川に身を投げたという。山出の里人たちは、これを憐れみ、毎年七月十四日、この淵で、鉦や太鼓を打ち鳴らし、念仏踊を舞う。翌十五日には、緑川を渡り、源氏の白旗に見立てた白布を竹に結び、笹踊りを「ヒナイ神」(鯰塚)に奉納すると伝説がある。(半田隆夫1999『神佛と鯰』私家版 pp.20-25)
- 33 大鯰の碑は平成14年9月に行われた式年祭(12年に1度)の御船祭時に地元の石材会社から送られた記念品であるという。
- 34 島根県の長浜神社は現在夫婦石子授け・安産祈願)としているが元は地震除災の祈願内容であった。また、鹿児島県の天之御中主神社については、眷属、皮膚病、禁忌として鯰信仰が伝わっている(半田隆夫1999『神佛と鯰』私家版)が、石造物は、あうんの仁王様(石像)を指す。手と鼻がないためそういった悩みを持つ人はさすると治るとされ、また全般的な病気にもご利益があるとされていた。鯰にまつわる部分が薄いと判断することもできるが、この寺社は鯰が神様であるため、昔は鯰の絵馬がたくさん掛けられ、池もあり鯰もたくさんいたという。そして鯰は眷属との伝承も残っていることから、総合的に判断し「その他」に区分した。
- 35 五来 重1988『石の宗教』角川書店 pp.18-21
- 36 細田博子2017「鯰絵馬に込められた病平癒について」『國學院雑誌118(9)』國學院大學総合企画部 pp.79-104
- 37 半田隆夫1999『神佛と鯰』歴史文化出版会 pp.17-19
- 38 岩井宏實「暮らしの中の神さん仏さん」1980文化出版局 pp.155-156

- 39 年禰神社は阿蘇の神話の中で水神として伝えられているが、皮膚病祈願はない。
- 40 五来、前掲 pp.32-33
- 41 同県で時代に差異がある場合は、最古の時代を代表としている。
- 42 岸川雅範2016「都市祭礼における伝統の継承と変容―神田明神を事例として」『文化資源学』第14号
文化資源学会 p.87
- 43 詳細は、黒田日出男1993「天下祭り絵巻の世界―龍ヶ崎市歴史民俗資料館所蔵「神田明神祭礼巻―」
『王の身体王の肖像』p.130にあるほか、住吉内記広定1974『神田明神祭礼絵巻』神田神社社務所福
原敏男2012『江戸最盛期の神田祭絵巻：文政六年御雇祭と附祭』渡辺出版、福原敏男2015『江戸の
祭礼屋台と山車絵巻：神田祭と山王祭』渡辺出版などの研究史がある。
- 44 喜田川守貞1996『近世風俗志（守貞謄稿）（一）』岩波書店 pp.314-315
- 45 同書 p.315
- 46 若水俊2007『江戸っ子気質と鯰絵』角川グループパブリッシング p.49
- 47 加藤光男「鯰絵総目録」『鯰絵』里文出版 p.355
- 48 若水、前掲 pp.51-53
- 49 盗賊に盗まれた宝剣が大鯰に返信していたことから、今も失われた宝剣を探し続けていることを神
に報告するために行なわれている祭礼である。兵庫県教育委員会編2003『平成15年度指定 兵庫県文
化材調査報告書』p.24発祥時期は「天文11年ごろには「なまずおさえ」の神事も営まれていた」（片
岡正光1996「西脇市指定無形民俗文化財石上神社「なまずおさえ」神事と近世宮座」『兵庫史学研究
会誌（42）兵庫県歴史学会事務局』p.4の説がある一方、「少なくとも宝永元年（1704）には関与し
ていたとしながらも「なまずおさえ」神事の役付を記した文化6年（1809）の文書が最も古い」とい
う。兵庫県教育委員会編2003『平成15年度指定 兵庫県文化材調査報告書』p.29
- 50 井口八幡神社の水神祭「川なまず」については、昔祭りの際に、田んぼの水や川を止め、水を減ら
して溜めた中で、魚を取り、それを持ち寄り料理して食べる、という習わしがあった。しかし、次
第にその魚が減少し、海の魚を持ち寄るようにもしたが限界があり2、3年前から行われていない。
- 51 大護八郎1977『石神信仰』木耳社 p.199
- 52 半田隆夫1999『神佛と鯰』歴史文化出版会 p.2
- 53 本調査において、石造物の確認年や祭の発祥年については、文献が乏しく不明な部分が多いため、
口伝に頼らざるを得ない地域が存在したが、実際はさらに古くから伝わるものが多いと推察してい
る。また、高齢化により伝承者も少なく、発祥年に諸説ある文献もある。地域の方々の多くの調査
に感謝するとともにより詳細な文献資料の収集を今後の課題としていきたい。

